

## 主を待ち望む者は

(イザヤ書40・12〜31)

## 一、イザヤ書について

イザヤ書については、ずいぶん苦しみました。イザヤが一人なのか、複数のイザヤがいたのかということ。福音派と言われる、聖書が隅々まで誤りのない神のことばであると信じ、伝道熱心で、リバイバルを願う教会では「私共の教団もそうなのですが」、イザヤ書であれば、始めから終わりまで一人のイザヤが語り、書いたと受け止めます。そうしますと、おおよそ1章から39章までに描かれている紀元前8世紀のイザヤが、ペルシア王キユロスの出現を、しかも名指しで言い当てたこととなります。例えば、44章28節です。〈キユロスについては『彼はわたしの牧者。わたしの望むことをすべて成し遂げる』と云つ。エルサレムについては『再建される。神殿はその基が据えられる』と云つ。〉とあります。ペルシア王キユロスが、廃墟となっていたエルサレムの神殿を再建するという内容です。ちなみにキユロスは実在人物です。キユロス王は、なぜか、バビロン捕囚になつていたイスラエルに対して好意的でした。ただしイザヤよりも二百年ほど後の人物です。イザヤが一人だとし

ますと、二百年後のペルシア王キユロスの出現を名指しで言い当てたこととなります。18世紀まではそれを疑う人はいませんでした。ところが聖書を批評的に読む読み方が現れ、今日おおよそ落ち着いている受け止め方は、少なくとも3人のイザヤがいたという理解です。1章から39章までが紀元前8世紀のイザヤ、40章から55章までがイザヤから二百年後の第二イザヤ、56章から66章まではその少し後の第三イザヤであると。いのちのことば社以外の書籍の多くは、この立場で書かれています。ですが、この読み方にも問題があります。理由は、そんなに単純に区分できないことです。私が納得しているのは、フランシスコ会訳聖書の解説部分に紹介されている短いことばです。イザヤ書は、紀元前8世紀のイザヤによって書かれたものから始まり、一部は改訂され、次々に書き加えられ、最終的に一人の編集者によってまとめられ、今のかたちになったとする説です。「最終的に一人の編集者によってまとめられた」がミソです。なぜなら、編集者が一人であることによって、始めから終わりまで統一性が生まれるからです。3人のイザヤの預言がくつつけられただけとするなら、イザヤ書という統一性はなくなってしまうからです。

そこでイザヤ書を読む場合は、次のように受け取ることをお勧めします。

1章から39章までは、主として紀元前8世紀のイザヤの時代のことが書かれている。40章から55章までは、イザヤから二百年後のペルシア王キユロスによる「イスラエルはエルサレムに帰って神殿を再建せよ」という勅令を下した後の時代が背景になっている。56章から66章はサマリア人の妨害に遭い、神殿再建工事が頓挫してしまった時代のことだ。背景になっている。

## 二、主を待ち望む

12節、13節をご覧ください。〈だれが手のひらで水を量り、手の幅で天を測り、地のちりを升に盛り、山々を天秤で量ったのか。もろもろの丘を秤で。だれが主の霊を押し量り、主の助言者として主に教えたのか。〉とあります。主(ヤハウェ)なる神は、だれとも比較できない偉大な神です。エルサレムがバビロン軍によって攻め落とされて廃墟になり、住民がバビロンの地に連行されて行ったのに、それから50年後に、バビロニア帝国に替わって台頭したペルシア帝国の王キユロスの勅令により、祖国に帰って、神殿を再建するようになるなどとは、考えられないことです。

この世の勢力はみな、はかないものです。少し遡りまして、6節の途中から7節、8節をご覧ください。〈人はみな草のよう。その栄えはみな野の花のようだ。主の息吹がその上に吹くと、草は

しおれ、花は散る。まことに民は草だ。草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことばは永遠に立つ。〉とあります。永遠に不変不滅なものは、いつの時代にもありません。神のことばだけが不滅です。これが、イザヤが取り次いだメッセージです。

ではなぜ、イザヤはイスラエルに、懇切丁寧に語ったのでしょうか。それはイスラエルが不満を持っていたからです。27節です。〈ヤコブよ、なぜ言つのか。イスラエルよ、なぜ言い張るのか。私の道は主に隠れ、私の訴えは私の神に見過こされている。〉とあります。

私たちに当てはめるなら、信仰生活が続けてしばらくすると、何となく心の中でブツブツと文句を言うようになります。「私は忘れられているのではないだろうか。神さまは祈りに答えてくいださらないのではないだろうか」と。こういう「不信仰」は、芽の内に摘み取っておかないと、やがて厄介なことになります。特效薬はあるのでしょうか。ありません。主を待ち望むことです。31節です。〈しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることが出来る。走っても力衰えず、歩いても疲れない。〉と。主を待ち望むとは、目に見えない全能の神、父・子・聖霊なる神に取り扱われる時間です。人は、神に取り扱われることにより、主の御思いを知るようになり、変えられます。